親鸞聖人（上）

一郷正道

現時点での筆者の親鸞聖人像を以下にまとめておきたいと思う。

I.

聖人は九才で出家し二〇年間を比叡山で修行されたと伝えられる。

「明日ありとおもうこころのあだ桜　夜半に嵐の吹かぬものかは」

と伝聞されるように堅い決意のもとに出家されたという。しかし、無礼を承知の上で述べるならば、聖人とて九才にして菩提心発露のもと出家なさったとは思えない。さまざまな状況によるものと考えたい。すなわち、貴族の子弟の習慣であった、下級貴族の経済的困窮から、母が源氏の出自ゆえ聖人の身の安全のため、等々。

二〇年に及ぶ比叡山での修行を通して、聖人は次の如き三つの深刻な課題を抱えておられたと推測する。

（1）性の問題

慈円の『愚管抄』で「女犯ヲコノムモ魚鳥ヲ食モ、阿弥陀佛ハスコシモトガメ玉ハズ。一向専修ニイリテ念佛バカリヲ信ジツレハ一定最後ニムカヘ玉フゾ」[1]と誹謗される当時の出家僧の現実は、青年僧の聖人とて他人事ではすまされるものではなかったであろう。

（2）断煩悩得涅槃

これが比叡山での修行の目標であったであろう。しかし、聖人にとって修行を積めば積むほどその難しさに対峙し意の如くならぬ自己との葛藤に苛まれたにちがいない。それは肉体上の限界もさることながら目標そのものの不可能性とのギャップによる煩悶である。

（3）死と浄土往生

この問題が現実化した契機は、尊敬する聖徳太子御廟への参拝の折、与えられた次の如

き夢告にあったと推測される。その時、聖人は十九才であった。

我が三尊は塵沙界を化す
日城は大乗相応の地なり
諦らかに聴け諦らかに聴け我が教令を
汝の命根応に十余歳なるべし
命終して速やかに清浄土に入らん
善く信ぜよ善く信ぜよ真菩薩よ

十九才で余命は十余年と宣告された聖人の心中はいかなるものであったか。死の到来を深く心に刻まざるを得なかったにちがいない。一方で、叡山では現世での断煩悩得涅槃を目標にしているのに、「命終して速やかに清浄土に入らん」と授記される。難行の修行の現実と命終後の入浄土の理論との整合性はいかに説明し納得したらいいのであろうか。

聖人の苦悩は深まるばかりであったと言っても過言ではない。

そこで聖人のとった行動は「山を出でて、六角堂に百日こもらせ給いて、後世を祈らせ

給いける」（『恵信尼文書』聖典六一八）であった。あのエリート達の教育、修行の最高の教育機関であった比叡山の地を捨てたのである。この事件は、釈尊が苦行を放棄して五人の修行仲間から軽蔑された故事を彷彿させる。

六角堂にこもって九十五日目の明け方、今度は救世観音から次のような夢告を受ける。

行者夜報にてたとい女犯すとも
我玉女の身となりて犯せられん
一生の間能く荘厳して
臨終に引導して極楽に生ぜしめん

この夢告は、とくに前述（1）の「性の問題」を解決する手がかりとなる貴重なものである。しかし、これは、女犯を許すという、僧にあっては破戒の身となることを意味しており、かえって聖人を悩ませたのかもしれぬ。

Ⅱ.

では、聖人はこれら三つの難題をいかにして解決されたのであろうか。それは、法然上人との出遭い、ならびに法然上人が気付いておられ、後述するように法然上人から教えられた善導の『観経疏』散善義のほんの一・二行の文言の理解によってであった、と言えよう。

（1）性の問題

まず、（1）の問題は、法然上人の次の文言の理解によって克服された、と理解する。

現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし。……聖で申されずば、妻をもうけて申すべし。妻をもうけて申さずは、聖にて申すべし。

（『和語燈録』）

これは結婚を認め、前所引の救世観音の夢記の「女犯」を許すことであり、破戒僧になることを促しているとも言える。要は、念仏ができるかどうか、念仏申しやすい状況をつくれということである。

或る著作[2]によれば、聖人は泣く泣く上人の命令に従って九条兼実の娘、玉日姫との結婚に踏み切ったということである。

聖人にとって、結婚が「念仏の申されん様に」なったかどうか判断する定かな資料はないかもしれぬ。しかし、「よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」また「法然聖人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう」という『歎異抄』の文言を証す出来事であったことは間違いないといえよう。そして聖徳太子の前例に倣うことにもなった出家者の妻帯しての求道生活は、日本の仏教史上画期的なことであり、大乗の在家仏教実践の先駆者になられたわけである。破戒僧という蔑称、汚名を浴びようとも人間の本性に逆らうことなき仏教の実践道の範を垂れて下さったことになる。聖人のこの決断こそ出家・在家の溝をうめ仏教への親近性を高めて下さった史的慶事であったと言えよう。

（2）断煩悩得涅槃

次に（2）の問題は、上人の「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」（『末燈鈔』聖典六〇三）という一言によって解決されたと理解する。

比叡山における修行目標であったと考えられる「断煩悩得涅槃」は、少数の人には可能であったかもしれない。聖人にとっては真摯に向かえば向かうほどその不可能性を自覚せざるを得なかったであろうし、それによる内心の葛藤はきわめて深刻であり想像を絶するものがあったことは間違いないであろう。自力の限界の真底からの自覚である。

それでは、なぜ「愚者」になれば往生できるのであろうか。往生については後述するが、多くの高僧方は次のように愚者があることを表明しておられる。

法然：十悪の法然坊、愚痴の法然坊

親鸞：愚禿親鸞

最澄：愚が中の極愚、狂が中の極狂、低下の最澄

良寛：大愚良寛

それでは、愚者とはいかなる存在か。「自分は愚者でしかないと自覚した人」「自力無効と理解した人」と筆者は理解する。

聖人は「正法の時機と思えども　低下の凡愚となれる身は　清浄真実のこころなし　発菩提心いかがせん」（「正像末和讃」聖典五〇一）と告白されている。清浄真実のこころなき聖人にとって、自ら菩提心を発することなどできはしない、いわんや断煩悩得涅槃というお題目などどうして掲げられようか。このような厳しい自己省察のできる人こそ、真の愚者であろう。

そして、かかる愚者とは、次のような凡夫人であることを正直に表白できる人のことであると筆者は理解する。

凡夫というは、無明煩悩われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず……。

（『一念多念文意』聖典五四五　八十五才）

凡夫とは、臨終の一念までこの愚者性の消滅しない存在であって、聖人は自らをこのように表明しているのである。であれば、聖人にとって、現世においての断煩悩得涅槃など、全く想像だにできなかったことにちがいない。

現世における断煩悩得涅槃の不可能性の気付きは、自力無効の認識と換言できる。自分のいのち、生命の中枢機能である心臓の鼓動すら、自分の能力でいかんともしがたいわけであるから、私は私に対して無力な存在であると云わざるを得ない。

清澤満之師は、「私共がとなえている精神主義というのは、閉口して閉口して、閉口し終わったという告白の他の句ものでもありません」と語られたという。幡谷明師は、この清澤師の「閉口して閉口して閉口し終わる」深い懺悔、すなわち自力無効ということが精神主義であると解説されておられる。[3]

愚者＝凡夫＝自力無効と図式化される聖人の実像は、無礼を顧みず申せば、この筆者とどれほどの差異があるのであろうか。ここにも聖人との親近性を見出すのである。

愚者であり、凡夫であることに気付けば、自力修行による断煩悩得涅槃がいかに不可能なことであるかは容易に察せられる。それでは、凡夫たる私でも宗教的に救われる道はどこに見出されるのであろうか。それは、仏の利他行への憑依しかないであろう。救いとは

何か、いかにしてそれは可能なのかを問わざるを得ない。

（3）死・浄土往生への問題

結論的には、浄土往生こそが救いであり、それは称名念仏によって可能になると教えられることによって、（3）の「死・浄土往生への問題」が解決されるのである。

救いの境地については後述するが、なぜ称名念仏によって浄土往生が可能になるのか、という問題は、次の『観経疏』散善義のほんのわずかな文言に法然上人が出逢い、それを親鸞聖人も教授され納得されたということで解決されたといえる。

一心にもっぱら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるは、これを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるがゆえなり。

（善導『観経疏　散善義』　浄土真宗聖典全書七六七）

所引の「念じて」の「念」は、善導によって「称える」と同義語になったとされる。さらに法然上人が、「念と声とはこれ一なり」（念声是一）と受けとめ、聖人もこれを継承さ

れた。ここに念仏即称名の思想が確定したと藤田博士は述べておられる。（藤田『浄土三部経の研究』四五四）

従って、称名念仏こそが、浄土往生のための正しく定まった実践行である、と宣言され、しかも、それは仏の願に順ずるからである、と善導が理解されたことが判明する。この善導の理解に法然上人が目を開かれ、聖人も納得されたことを意味する。この『観経疏』の一文こそ、『歎異抄　第二章』にみられる本願―釈尊―善導―法然―親鸞と相承されてきた仏教史観の源といえよう。称名念仏によって極楽往生が達成されることが明らかになったのである。

そして、これこそが、人生における最大の苦である死苦からの解放について教えるものであり、比叡山での修行・目標と全く相容れぬ世界を明示し、人類の救済をもたらすことになったといえよう。

（以下次号へ）

註

（1）『愚管抄』（日本古典文学大系86　岩波書店　昭和四十二年）二九四頁

（2）梅原猛『親鸞「四つの謎」を解く』（新潮社　二〇一四）一八六～一八七頁

（3）幡谷明講述『大悲の妙用』（光明国山口支部　平成十三年三月）一五頁